

茶馬古道をゆく ー雲南からチベットへいたる古道の旅ー

①茶の原産地 シーサンパンナ プーアル 西双版纳と普洱

小林尚礼

○茶馬古道とは

茶の原産地とされる雲南と四川から、チベットへいたる交易の道である。雲南や四川の茶葉と、チベットの馬を取引し、馬(ラバ)を使って運送したことから「茶馬古道」と呼ばれる。広義には、北京や東南アジアへ茶葉を運んだ道も含む。また、チベットから先は、インドへそしてヨーロッパへも続くことから、古の国際交流の道といえる。

「茶馬古道」は、唐代にその原形が生じたといわれる。唐の皇女「文成公主」が吐蕃に渡ったのち、チベットに喫茶の習慣が根づいた。宋代には、茶の需要が高まったチベットと、高原産の軍馬を必要とした中国の間で、安定した交易が行われるようになった。元・明代には、チベットが軍馬の重要な供給地となり、麗江の土司に任命されたナン族の木氏が、茶馬古道の交易を掌握した。チベットからは薬草や毛皮なども運ばれるようになり、中国からは茶葉のほかに塩や砂糖が上がった。清代に入ると木氏は特権を失い、民間の商人が交易を担うようになった。

日中戦争時には、インドから中国へ軍事物資などを輸送する道として栄えた。茶馬古道の最盛期と言われる。戦後、中華人民共和国の成立とともに個人商売は禁止され、茶馬古道は活気を失う。しかし、1959年のチベット解放の前後に再び特需にわき、道は息を吹き返す。その後、馬のキャラバンは車へと置き換わり、茶馬古道はその長い役目を終える。

*2007年5月に、西双版纳から梅里雪山の間を1ヶ月かけて旅した。2008年に後半のラサへの旅を行う予定。

○訪ねた古茶樹

- ・勐海県 南糯山: 樹高10m弱、幹直径約30cm、幹周囲約70~80cm (Camellia sinensis var. assamica、栽培)
- ・勐腊県 易武郷 落水洞: 樹高約10m、幹直径約40cm (推定樹齢700年?)
- ・寧洱県 困鹿山: 樹高26m、根元で3本に分かれる (2002年発見、推定樹齢1700年?、野生)

○取材した茶の飲み方

- ・土鍋茶 勐海/ハニ族
- ・ひょうたん茶 倚邦/漢族他
- ・涼拌茶 基諾山/ジノ族
- ・竹筒茶 基諾山/ジノ族
- ・烤茶 巍山/イ族他
- ・三道茶 大理/パイ族
- ・龍虎斗 麗江/ナシ族
- ・バター茶 香格里拉/チベット族

○訪ねた古道

(西双版纳)

- ・易武の村内 石畳の道
- ・麻黒・荒田近くの蜈蚣橋 石造りの小橋
- ・倚邦の村内 石畳の道

(普洱)

- ・寧洱手前の坡脚 稜線へ上がる踏み跡 (所々に石あり、普洱と寧洱をつなぐ古道)
- ・寧洱手前の那柯里 馬店 (大部分は壊れているが、子孫住んでる)
- ・磨黒の付近 土の道 (昆明へ続く)
- ・哀牢山・千家寨 山中の石畳の道 (付近に鉄鋼炉がある)

【お知らせ】

- ・月刊誌『Coyote(コヨーテ)』No.23 発売中 (スイッチ・パブリッシング刊)
特集:中国茶 「茶馬古道を辿る」、「茶馬古道で出会った少数民族のお茶」(カラー36頁)
- ・ドキュメンタリー番組『梅里雪山 十七人の友を探して(仮題)』(日本テレビ)
2008年1月27日(日)13:30~14:55 放映予定

